

2014/7/12 経済学部講演会の模様

Workshop on Philosophy of Perception

David R. Hilbert [University of Illinois at Chicago]

Koji Ota [The University of Tokyo]

Mineki Oguchi [Tamagawa University]

Takuya Niikawa [Hokkaido University]

2014. 7. 12 [土] 13:00-17:30 / 大津サテライトプラザ



本講演では、イリノイ大学シカゴ校哲学科のディヴィッド・ヒルバート教授をゲスト・スピーカーとして招き、知覚の哲学のワークショップを行った。知覚の哲学では、「知覚において主体に見えるものは何か」「知覚経験の本性は何か」「知覚によって知識はどのように獲得されるのか」などの問題が扱われる。知覚の哲学の特色の一つは、その領域横断性にある。知覚については、現在、心理学や神経科学などの分野において様々な解明が試みられている。知覚の哲学は、このような経験科学の知見を視野に入れた上で、そこに生じる様々な哲学的問題に取り組む活動である。本ワークショップでは、知覚の哲学の専門家であるヒルバート教授に加え、知覚や意識に関する研究に携わっている日本の若手研究者を講演者として招いた。以下、各講演者の発表内容を簡単にまとめておく。

太田氏の発表「心-脳における知覚意識の(不)統一性」は、知覚における意識は統一されているのかという問題を巡るものである。この問題については、肯定的に答える「全体論」と否定的に答える「原子論」の二つの立場があるが、太田氏の診断によれば、どちらの立場も現象的統一性と因果的統合性を混同しており、それゆえ、両者とも説得力を欠いていることが結論づけられる。小口氏の発表「概念主義と知覚経験の階層性」は、概念主義(知覚経験の表象内容はすべて概念的であるという立場)を擁護するものである。小口氏が擁護する概念主義は注意に概念的内容を統合する役割を与えるものだが、それだと、注意が払われていない視覚場面の周縁部の知覚内容をどう特徴付ければよいのかという問題が生じる。この問題を解決するために、小口氏は Hochstein & Ahissar が唱える「逆階層説」を採用し、周縁部の知覚内容も概念的だと言いうことを主張した。新川氏の発表「色とは何であるか—素朴实在論の観点から」は、従来想定されてきた素朴实在論と色の原始主義の結びつきを切り離す試みである。本発表では、素朴实在論を原始主義と結びつけてきた議論に十分な説得力はないということが論じられた上で、原始主義と切り離された素朴实在論がどのような色の存在論を採用すべきかが検討された。ヒルバート教授の発表「知覚の恒常性」は、従来ひとまとめにして語られがちであった知覚の恒常性は、色と大きさについては別に扱う必要があることを論じるものであり、知覚において感覚的要素と認知的要素が有する関係の複雑さが指摘された。

以上の発表はいずれも先端的な研究内容であり、国内における知覚の哲学のワークショップとしては、極めて踏み込んだ内容のものであったと思う。活発な哲学的討論を行って下さった講演者と参加者の皆様には深く感謝申し上げます。周知の通り、本学部は大規模の総合経済学部であるが、今回の哲学ワークショップはそのような本学部における研究の多様性を示す好例だと言えよう。参加者 12 名。

(経済学部准教授 西村正秀)